

# 令和俳句論考

蒲生 友紀子

果てしなき道はどこまで虚子忌来る

山田 貴世

どこからが余生ひぐらし聞きながら

〔第五句集「草の花」より〕

一句目「果てしなき道」は「虚子忌」によって俳句の道だと連想される。それ以外の道と考えてもよいが、季語「虚子忌」が大きく響く。氏は、二〇一六年に「波」の三代目主宰に就任された。そして今年五月に「波」は五十周年を迎えられる。それを記念した句集であるとのこと。俳句の道もまた完成などない「果てしなき道」である。集中、前書きに「泰夫師」の句が毎年掲載されている。「春なれや何につけても師の墓へ」師を敬う気持ちがあふれて感じられる。二句目、定年六〇歳が六五歳、七〇歳へと移行しつつあり、また、定年制度廃止案まで出ている昨今。「どこからが余生」との気持ちがぼろりとつぶやきとなった。「ひぐらし聞きながら」に夏の終わりの切なさを感じつつ、まだぎらぎらしている暑い日をも連想した。さてどちらの心境で過ごそうか。

氏は「波」主宰。

天の息地の息数へ赤とんぼ

藤田 博

永遠の日曜日めき冬うらら

〔第一句集「甲斐連山」より〕

集中の解説によると、氏は山梨県甲府市に暮らし、これまでに六冊の詩集と二冊の著作集を刊行してきた詩人である。長谷川權氏の講座に通ったことがきっかけで、講座修了後は結社に属さず地道にノートに句を書き留めておられるそうである。一句目、「天の息地の息」がいかに山間にあふれ出る空気感を表し、甲斐国の自然の描写だと思った。その「天の息地の息」の濃き間合いに赤とんぼが悠々と飛んでいるのだ。雄大な自然を感じずにはいられない。一転して二句目は人間の生活の句である。冬の寒さ厳しい日々を訪れる「冬うらら」の穏やかで温かい日和の空気感。寒さにこわばった身体も心のびのびと解放されるような心地よさ。それを「永遠の日曜日めき」と詠まれた。読む側も同じ気持ちになるいつの間にか共有している。

稲の香や無人駅舎に竹ばうき

半田 卓郎

まつ直ぐに生きてポプラは黄落期

〔第三句集「直心」より〕

「句集名称の『直心』は、先師小澤克己主宰が生前信条としておられた言葉で、『ちきしん』とも『ひたごころ』とも読みます。まつすぐな心で修行に打ち込むことこそが肝要で、『詩の心…詩性』を特に強調され、『俳句は、心をまげてうまくなるうとするな』と言われておりました。」とあとがきにある。氏は現在卒寿を過ぎて二年目（二〇二五）で、俳句を始めたのは七〇過ぎとのこと。一句目、無人駅舎に着き、ふと稲の香に気づいた。駅舎の周りには田があるのだろう。そして置かれた竹箒に気づく。無人の駅舎だが誰かがそこを清めている。人の存在が際立つ不思議な

句であり、豊かさを感じさせる魅力がある。二句目、「まつ直ぐに生きて」で切れて作者の生き様を思う。しかしそれは「ポプラ」にも響いている。「黄落期」はまさに耀く時期でもある。

氏は「爽樹」顧問。

叔母たちのお国訛や花火船

岩本 功志

パラソルや来ぬ君の椅子用意して

(第二句集『マールウ橋』より)

「叔母たちのお国訛」とあらば、読者はそれぞれの叔母の訛を思い浮かべるかもしれない。それでよいと思うが、ちなみに氏のご出身は鳥取県だそう。季語「花火船」によって、屈託のないおしゃべりと歓声が聞こえ、何とも楽しい景が浮かんできた。一転して二句目は「来ぬ君」が寂しい。明るい日差しが出ているのに。椅子を用意しているのに。最愛の奥様を亡くされたことが巻末のエッセイに書かれている。転勤で二十回くらい家を替わった中で一番楽しかった、というイギリスのマールウにある橋の名を句集名にされた。奥様との一番の思い出の地とのことである。氏は高校三年生の時に氷川丸でアメリカ留学をされたそう、以来たくさん土地を訪れたことが集中の句によって伝わってくる。

氏は「野火」同人。

色えんびつに白のありけり風光る

家田あつ子

栗を剥くクラスの様子聴きながら

(第一句集『旅靴』より)

氏は「笹」入会后二五年を越えてこの句集を編まれた。「笹」主宰の山本一歩氏の「俳句は平明な言葉で、見えるように、美し

く」の理念のもと研鑽を積んでこられた。一句目、お子さんが使っているのだろうか、普段通りに色えんびつが並んでいる。ふと白に目が行く。あまり減らずに長いままだ。外は「風光る」季節。突如この二つが響き合い始める。春の日のまぶしさが共鳴し、「白」が輝きだした。二句目、栗を剥くのは一苦勞である。だが、おいしい栗料理を思い浮かべてはその労に勤しむ。そんな作業に、お子さんかお孫さんかの今日の学校の報告が加わる。それはさぞかし楽しい時間だろう。その後のおいしい栗料理も思い浮かぶ。

氏は「笹」同人。

透きとほることの淋しき葛湯かな

岡崎由美子

線香花火片手は小さき膝を抱き

(第一句集『くれよん』より)

一句目、飲めば体を温めてくれる葛湯だが、「透き通ることが淋し」と作者は言う。どきりとした。粉であったり、固めてあったりの形状の違いがあっても、基本葛湯は白い色をしている。熱湯を注ぎ起でかき混ぜるうちに白いものが次第に透き通ってゆく。氏の、それに目が行ったこと、淋しいと捉えた感性に惹かれた。二句目も確かな写生である。「小さき膝を抱」いているのはおそらく幼い華奢な子どもである。線香花火は、最後に玉が落ちないようにじっとしていなくてはならない。幼き子は玉の方に目が行って、自分が膝を抱えていることには気づいていない。無心に花火を見つめるまなざしまで目に浮かんだ。

氏は「艸」同人。

(筆者住所 〒309-1622 茨城県笠間市南吉原二七九一五)